

米国の服飾文化を訪ねて : 第12回国際服飾学会 議報告と服飾資料館研修

著者	泉山 幸代
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	29
ページ	233-244
発行年	1993
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001183/

米国の服飾文化を訪ねて

—— 第12回国際服飾学術会議報告と服飾資料館研修 ——

Visiting Costume Museums in United States of America

泉 山 幸 代

Sachiyo IZUMIYAMA

I はじめに

服飾に携わる誰もがそうであるように、私もかねてよりニューヨーク州立ファッション工科大学（Fashion Institute of Technology 以下 FIT と略す）の訪問を望んでいた。なぜなら FIT はファッション専門家の養成の分野で、世界的に有名な大学だからである。昨年末、国際服飾学会より第12回の国際会議を FIT で開催するとの連絡を受け、熱望している FIT に行くことができる、願ってもないこの機会を生かしたいと思い、早速参加申し込みの手続きをした。

国際服飾学会による米国服飾研修の日程は、1993年7月26日から8月7日までの13日間、主な内容は第12回国際服飾学術会議、FIT 研修及び服飾資料館研修である。会議は7月27日より4日間行われた。開会に当たっては FIT の全面協力のもと、前メトロポリタン美術館服飾研究所キュレーター J. Druesedow 女史と国際服飾学会との一年間にわたる綿密な準備により実現したものである。会議日程の後半、FIT スタッフによる施設設備見学とパネル・プレゼンテーションが行われた。そして会議後の7月29日から8月6日まで、アメリカ東部諸都市にある美術館のコスチューム部門を訪ねる調査旅行が行われた。以前より、ヨーロッパの服飾美術館に少なからず影響を与えているといわれる米国の美術館付設服飾研究所の概況を知りたいと思っていたので、大きな関心をもって参加した。加えて服飾資料品に実際に接して、若い歴史の中での米国服飾の流れや、ハンディクラフトの動きなども垣間見たいと思った。

以下のレポートは「北海道女子短期大学特別研究海外研究」に基づく研修者として、上記の研修に参加し、その研修概要を報告するものである。

II 国際服飾学術会議と FIT について

1. 第12回国際服飾学術会議

会議は FIT の D 館デザイン・センターで開かれた。1 階と 2 階が吹き抜けの壁の木目が美しいホールである。会場に入り椅子に座ると、FIT に来ることができたという感慨がわき、ニューヨークにいるのだという実感をかみしめた。

参加者は FIT 関係を中心とする米国参加者をはじめ、デンマーク、台湾、韓国、中国、日本から併せて約120名である。会議は開会式、基調講演、招待講演、11件の研究発表のほか、レセプション、見学会（Soho Tour）と充実した4日間であった。ここでは、開会式、講演の内容要旨を述べることにする。なお、本会議は同時通訳が全くなく、すべて英語で行われたため、配布された資料と、集録したビデオ・テープを何度かリプレイしての内容である。和訳部分の難しさもあり、不明瞭な箇所があることを御諒解いただきたいと思う。

(1) 開会式

オープニング・セレモニーは、心地よい緊張感が流れる中、27日午前10時より始まった（写真1）。まず国際服飾学会丹野郁会長の開会の辞があり、その中で会長は本会議準備のためにご尽力下さった J. Druesedow 女史と、会場準備など絶大な協力をいただいた FIT のスタッフに謝辞が述べられた。さらに服飾界で世界の首位を占めているニューヨークの、そのエネルギーを育む FIT において、国際会議を開催するのが多年の夢であり、実現の運びとなり大変喜ばしいと挨拶された。続いて韓国服飾学会、中華服飾学会からの祝辞があり、FIT の D. Globus 女史から歓迎のスピーチをいただいた。最後にイギリス、ポルトガルの学会員からの祝電が披露された。

(2) 基調講演

「Fashion and the Retail Setting ファッションと販売環境」

ファッション工科大学教授 Martin M. Pegler 氏

FIT で Store Planning と Visual Merchandising を担当している M. Pegler 氏（写真2）の講演要旨は次のとおりである。

芸術、建築の歴史はファッションと服飾デザインの多くの部分を占めている。芸術と建築が我々の時代の反映であるように、ファッションはそれが流行していたという点においてその時代の反映である。ファッション商品を販売するためには、より良い環境が必要である。つまり商品の“イメージ”を潜在的に準備する環境である。それゆえ店づくりを計画する時点で望ま

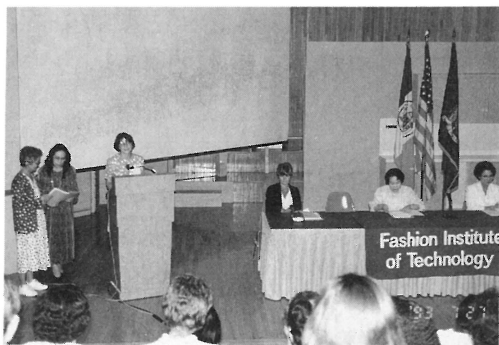


写真1 開会式



写真2 基調講演

しい“イメージ”とはすべて店舗の計画とデザインにあるといえる。デザインとはインテリア・デザインの部分である。その大部分は視覚的表現（ヴィジュアル・プレゼンテーション）である。視覚的表現は最善の陳列商品の芸術である。それはファッション商品を販売する上での最も重要な手段である。つまり視覚的表現と販売は今日の小売業がいかにあるべきかを示している。

販売の光景は今世紀の最近10年間を出発点として低下してきているが、店舗のデザインは独特の魅惑的な販売環境となってきた。小売業はいま2つの方向をもっている。一つは豪華でエレガントな環境を拡張する方向であり、他方はより小さなスペースで限られた予算で解決するという縮小された方向である。また小売店のデザインは19世紀初頭のテーマやスタイルを回顧しているが、一方では宇宙時代の環境を伴った次の世紀を予測しているのである。これは新しい顧客をさがし求めているからである。

次にイメージについて、これは偉大な動機となるデザインの要素である。すなわち特別な市場や購売者をひきつけるような外観を創造することである。店舗デザイナーの多くは“商品の陳列と演出”の重要性について述べている。いかにどのように商品がアレンジされ、いかに環境や、色彩が価値を高めるか、つまりいかに商品のイメージを高めるかということである。

(3) 招待講演

「The Danish Clergical Robe デンマークの聖職服」

元コペンハーゲン国立博物館キュレーター Hanne Frosig Dalgard 氏

国際服飾学会会員である H. F. Dalgard 氏の、約40枚のスライドを準備されての講演要旨は次のとおりである。

デンマークは北欧にあつてマルチン・ルターの改革を経験している。この改革は1536年の法令によって導入され、宗教だけでなく、政治、社会、日常生活に関しても新しい関係が形成された。この革命的な出来事で聖職者が、新しい聖職服を着用することになった。現代とのかかわりにおいて、この聖職服については大変興味深いものがある。ここではデンマークの聖職服について技術的なディテールを明らかにしたい。それを分析することは社会的機能としての、社会的サインとしての聖職服の解明になるだろう。

デンマークの聖職者や修道士は、中世を通してヨーロッパの聖職者と同じ服装をしていた。しかし15世紀末から衣服の型が、特徴的なものに変化していった。それは“Simarr”というゆったりとした袖つきのジャケットである。頭には“Baret”という丸い被り物をつけていた。ルターが宗教改革に着手した16世紀初頭はこの姿が一般的であった。

デンマークにおける1536年の改革以降、聖職者達はデンマーク王から任命されるようになった。つまり王に絶対的に忠実な聖職者階級が生まれ、1849年に民主主義が導入されるまで、すべての教義に強い制約が加えられた。この改革時代、デンマークの聖職者達は黒を好んで着用した。しかし市民と同様に、黒以外の衣服も着用した。

ディテールにおいて特に興味深いものに、麻の衿があげられよう（写真3）。1620年から30

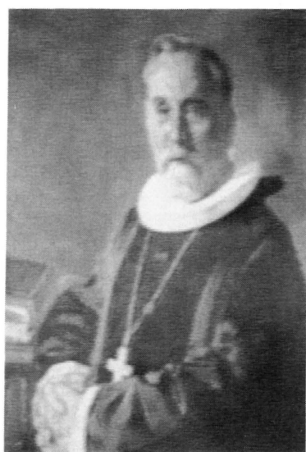


写真3 デンマークの聖職服より



写真4 FIT C館にて

年代の聖餐式に聖職者達は白麻のラフつきの長いローブを着用し始めた。このときからこの服装は公的な性格をもつようになった。さらに技術的なディテールとして興味を集めるのは、聖職者のガウンの前面を堅く糊づけしたことである。裏には鯨の髭がつけられていた。

1948年に3人の女性神学者が礼拝を司るよう命じられたことは、全キリスト教世界で革命的なことだった。論議の結果3人は、ボタンがけだけが反対の男性と同様の聖職服を受位式に着用した。

2. FIT (Fashion Institute of Technology)

FITはマンハッタンの中核部からやや西南に下ったところに位置しており、セブンス・アヴェニューに面し、28番通りのワンブロックと、27番通りの2分の1ブロックの面積を有している。まずニューヨークの真ん中でこの敷地の広さに驚かされる。FITの近くにはアメリカの代表的なファッションメーカーやデザインスタジオが密集しており、ファッションビジネスの中に位置しているといってもよく、ファッション産業と教育の場とが同一地域にあることが特徴である。

今年で創立49年になるという。ファッションアパレルの専門家を育成してほしいとのアメリカ繊維業界の強い要望から、1944年学生数百名で州立として発足した。(現在の学生数は一万名を超える)

今回、FITスタッフによるパネル・プレゼンテーションや施設見学が行われ、FITの概況について、もち帰った資料や参考資料をもとに、筆者の判った範囲内で述べてみたい。

(1) FITの教育

FITの教育は企業に就職したときに即戦力となる、つまり実務ができるような知識を教えることにある。しかもそれぞれの専門知識がバラバラではなく、コーディネートされたものでなくてはならない。そしてマーケットに合わせて、技術は新しく変化していくが、社会にですぐに役に立つように、数年先を考えて教えているという。つまり学生には学究的なものでは

なく、実務者となるための職業的なものを優先して教えている。ファッションビジネスとの“産学協同”を建学の精神としていることがうなづけるわけである。

(2) FIT の施設と収蔵資料について

FIT のキャンパスは、教室、学生ホール、リソースセンター（ライブラリー）、購売部など 5 つの建物で構成されている。アルファベットの A ～ E 館の呼称で呼ばれており、何度通っても判らない迷路のような回廊（地下であったり、建物により地上だったり）でつながれている（写真 4）。FIT の D. Koslin 女史の案内で見学した。この広い校舎を 1 時間 15 分という非常に短い時間制約のため、リソースセンター内の 3 箇所、教室も 3 箇所と限られ、図書館や、ソーイングルームなどを見ることができなく残念だった。階段をかけ昇ったり、エスカレーターにのったり、長い廊下を歩いたり……。

① E 館リソースセンター（ライブラリー）

FIT リソースセンターは 1975 年に建てられ、テキスタイルとコスチュームの収蔵においては、約 400 万点を超す膨大なコレクションを有し、数量的には世界最大規模のコレクションといわれている。これらの貴重なコレクションは、ブルックリン博物館の寄贈が基本となり、加えてファッションビジネスからの寄贈により成り立っている。生地コレクション 300 万点、コスチューム・コレクション 100 万点という数字は短期間の収集（18 年間）としては驚異的といえるだろう。その背景には寄付行為に対する税法上の免税措置が取られたために相当数のコレクションが収集できたといわれている。したがって年代により、収蔵数が極端に異なるわけである。（寄贈の多かった 1950～60 年代の作品が多く、逆に決められた予算で購入した 80 年代の作品が少ない）。そして収蔵する床面積の広さ（ワンフロア約 200 坪）に来訪者の多くは驚かされる。

リソース・センター内のテキスタイル・ラボラトリー、コスチューム・ラボラトリー、及びスペシャル・コレクションズルームを見学したので概要を述べることにする。

・テキスタイル・ラボラトリー（リソース・センター 3 F）

テキスタイル・ラボラトリーには 1650 年以降、各年代にわたる約 300 万点のテキスタイル・スワッチ（小サンプル）と約 1000 点の帽子、さらに 1500 年以降のベルト、靴、アクセサリ、傘、



写真 5 テキスタイル・ラボラトリー



写真 6 コスチューム・ラボラトリー

ハンドバックなど約3000点が陳列されている。キュレーターから、オールド・ファブリック・スワッチの説明を受けたが、非常に保管状態がよかった（写真5）。300万点という数量にも驚くが、収納する棚の多さにも圧倒される。棚の上には帽子のコレクションが、年代別に整然と陳列されている。別の棚にはショール、スカーフ、アクセサリが所狭しと収納されている。これだけ完全に揃ったのを目のあたりにすると、かなりの見応えである。

・コスチューム・ラボラトリー（リソース・センター2F）

テキスタイル・ラボラトリーの1階下に、ほぼ同じスペースのコスチューム・ラボラトリーがある。現在約100万点の資料が保管されている（婦人服1740年代、紳士服1760年代、子供服1800年代以降）。これらの服飾資料は壁面両サイドに12列にわたって、ハンガーにかけて上下二段に積み重ねて、天井高く吊るされている（写真6）。まず驚くことはこのダイナミックな収納陳列方法である。膨大な資料の保管方法として最善策なのだろう。勿論、傷みの激しいものや大切な保管を要するものは、収納ケースに紙に包んで保管されている（写真7）。しかし有名デザイナーの洋服がいとも無造作にかけられていて、大切なコレクションという感じを受けない。誰もがガラス越しではなく、手軽に近くから見たり触れたりできるのがこのラボラトリーの大きな魅力なのだろう。

勿論、コレクションの保全と管理には当然充分な設備がなされている。例えば来館者の訪問が直ちに察知できるようになっていたり、資料の破損を防ぎ、堅牢性を保つため温調の設備は完備している。他の博物館同様、資料保持のため照明は暗い。

コスチューム・ラボラトリー入口の真向かいに、コンサベーション・ルームがある。ここでは古い衣装の補修、再生作業を行っているという。残念ながら部外者は入室禁止とのことであった。

・スペシャル・コレクションズ・ルーム（リソースセンター435 A）

この部屋はFITとしても貴重なコレクションが保管されている。それらはファッション、テキスタイル、美術などの文献、図書、ファッションプレート、スクラップなどである。1860年代からの貴重なオールド・ファッション・ブックの範囲は、アンティーク・ファッション、民族衣装、テキスタイル・デザイン、美術、建築、インテリア・デザインに至るまで広範囲にわたっ



写真7 コスチューム・ラボラトリー



写真8 スペシャルコレクションズ・ルーム

ている（写真8）。その他19世紀から現在までの代表的なファッション雑誌も揃っている（例えば *Labells assemble 1806-1851*, *Vogue 1916-1939* など）。また極めて資料価値の高い、20世紀のファッション情報を集めたスクラップ・ブックもかなり収蔵されているのも珍しい。

しかしこれらのオールド・ファッション・ブックは基本的に貸し出しは行われていない。

② FIT の教室

FIT のファブリックメーカー・ルーム、ニットイング・ルーム、及びパターンメーカー・ルームの見学を行った。ファブリックメーカー・ルームは横編機、経編機、織機がかなりの台数揃っている（写真9、10）。これらの機械は企業に就職して直ちに仕事ができるように、最新の機械のほか、旧式のものも（企業によっては旧式を使用しているので）使えるように教育しているという。当然糸も企業で使用しているものと同じである。前述の FIT の教育の項でも述べたが、FIT とファッション産業の現場が一体であるとの意味がよく判り、実際に見てかなりの実践力が培われると推測することができた。

C・D・E 館の1階には広いロビーがある。そこは常設展示場として、学生の作品の発表の場であるという（時には有名デザイナーの作品展示場ともなる）。今回筆者が見た展示も、ニューヨークの活力溢れる部分と斬新な感覚部分とが漂っている作品群であった。特にデザイン発想と色使いが素晴らしい。流石 FIT である（写真11、12、13）。



写真9 ファブリック・メーカー・ルーム



写真10 世界の数台しかない織機



写真11 FIT 展示場 E 館



写真12 FIT 展示場 D 館



写真13 FIT 展示場 C 館

Ⅲ 美術館のコスチューム部門を訪ねて

今回の調査旅行ではアメリカ東部の各都市にある，以下のような美術館のコスチューム部門及びテキスタイル部門（或いは服飾研究所）を訪れた。紙面の関係上，下記の1，2，3の美術館についてその概況と，印象に残ったハンディ・クラフトの作品について述べることにする。

○ ニューヨーク

1. The Metropolitan Museum Costume Institute（メトロポリタン美術館服飾研究所）

○ フィラデルフィア

- Galleries of the Philadelphia Art Museum（フィラデルフィア・アート・ミュージアムテキスタイル部門）

○ ウィリアムズ・バーク

2. De Witte Wallace Decorative Art Gallery（デウィッチ・ワーレス・デコレイティブ・アート・ギャラリーコスチューム・テキスタイル部門）

キュレーター Brenda Laclair 女史

○ ワシントン

- National Museum of American History at the Smithsonian（国立スミソニアンアメリカ歴史博物館テキスタイル部門）

キュレーター Claudia Kidwell 女史

- The Textile Museum Washington, D. C.（アメリカテキスタイル美術館）

○ ボストン

3. Museum of Fine Art in Boston（ボストン美術館保存研究所）

キュレーター Marianne Carlano 女史 Deborah Bede 女史

なお，服飾関係以外の美術館については省略した。

1. The Metropolitan Museum Costume Institute

メトロポリタン美術館コスチューム・インスティテュート（以下 CI と略す）は1937年に小

規模のコスチューム・アート・ミュージアムとして発足し、服飾収集を次第に増大して1960年に、メトロポリタン美術館の18部門の一つとして独立した。コレクションは1937年のルイソン姉妹の寄贈により始まった。1500年代から現在に及ぶ収蔵品は約3万点を超えるという。CIの大きな特徴は収蔵品の調査ができるように、図書館、資料室、スタディ・ルームが完備していることである。ファッション・プレート、パターン・ブック、カタログ、テキスタイル・スワッチをはじめ、関連図書は15万5千点に及ぶ。

メトロポリタン美術館では次のようなことが可能である。ギャラリーでみた名画の衣装について、CIの資料室で、ほぼ同年代の服飾実物資料や布地スワッチを実際に手で触れて知ることができる。これは美術館付設の服飾研究所ならではの強みであろう。

CIはこれまでも服飾展（歴史的衣装の展覧会）には積極的にというより、ある意味のステイタスをもって取り組む姿勢がみられた。これは服飾界のみならず、美術関係者にも注目を集めるところとなるわけだが、その経緯は次のようである。

1970年代よりCIは年に一度企画展（1年のうちの数ヶ月間）を行うという方向をとってきた。ここでは衣装をオブジェとして促え、歴史衣装を死蔵品の陳列ではなく、人間が着る姿として、鑑賞の対象として、いかに楽しんで見るものにするかということであった。つまりどのような展示方法で見せるかということである。勿論学術的な研究対象としての衣装の位置づけは重要であり、それを踏まえての企画である。年度展のテーマは「現代衣服の源流展」、「サンローラン展」「ダンス展」と続いた。このCIの連続しての年度展はパリの衣装関連博物館の活性化に大きく影響を与えたという。

そして92年12月、CIの服飾展は大きく変わった。一年に数回テーマを変えて、内容もその都度一新して更に常設展示へと切り替えた。初展示は「ファッションと歴史の会話」、続いて93年4月からは「INFRA-APPAREL」である。いま、CIのこの新しい方向に誰もが注目している。

今回筆者はこの「インフラーアパレル」展を見たが、やはり今までの服飾展の企画とは異なるように思う。研ぎすまされた、或いは凝縮した美的表現の展示ともいえようか。

キュレーターより次のような説明があった。今回の展示は下着が表着に変わりつつトレンドを追求してみたかったという。展示の始めにあるJ. P. ゴルチェによるあの“マドンナ・ルック”に代表されるように下着が表に出てくるということは、マドンナの皮肉の意味も含めて“女性の力の表現”なのかも知れないと。40～50年前Tシャツは男性の下着だったが、それが次第に表着として定着したことを考えると、あるいは同じ感覚なのかもしれない。

5つのブロックに分けての展示は無駄のない簡潔な展示方法である。余分なものは一切置いていない。マネキンの配置はさすがに見事であり、落ち着いたやや暗いが微妙な照明の効果も見逃せない。サンローランのコールセット・ドレスの洗練された美しいフォルムにただただ見入ってしまう（写真14）。

地下のコスチューム収蔵室を見学した。キュレーターより保管・保存について次のような説

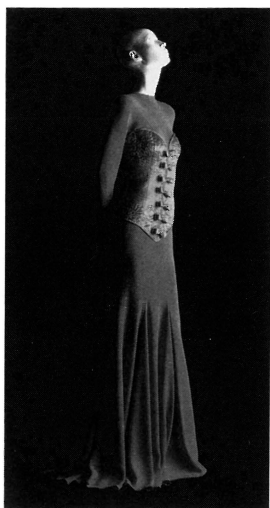


写真14 サンローランの
コルセット・ドレス

意し、同じ色に染色して補修する。収蔵品には必ず番号、年代、国名、デザイナー名の入ったラベルがつけられている（写真15）。

キュレーターが各年代にわたるドレスを事前に数点選んで準備していた。レクチャーが始まり、その中の16世紀前半イギリスの婦人用ダブルレットが、金糸、銀糸や色彩やかな刺繍が完全な形で残られており、ひときわ目をひいた。いつも刺繍の様式や技術が歴史の中で、どのような展開を見せていたのだろうかと思っていたので、当時の極致であろう刺繍技法を限りなくとり入れたこの作品は非常に興味深かった。ステッチ技法はディタッチ・ド・ボタンホールステッチで裏まで糸が通さないで表面に浮いているのがとても珍しい。前打合いから裾にかけて、また袖口に金の細かい Sequin（細かい金属のспанコール）がつけられていて美しい。これと同様なものが現在8枚ほど残されているが、この作品については常に研究者やデザイナーの研究対象になるという。当時の刺繍技法を知る手がかりになる作品であることは間違いない（写真16, 17）。

2. De Witte Wallace Decorative Art Gallery



写真16 16世紀のダブルレット



写真15 メトロポリタンミュージアム収蔵庫



写真17 16世紀のダブルレット拡大

ワシントンからバスで3時間走ったところにあるウィリアムズ・バーグは街全体が17～18世紀の植民地時代の姿を再現している。この中にあるギャラリーのコスチューム・テキスタイルの収蔵庫を見学した(写真18)。多くの収蔵品の中で18世紀後半のアメリカの召し使いの衣服を見せていただき、大変興味深かった。キュレーターの説明によると、当時大きく広い世帯では召し使いにお仕着せを着せており、色は通常主人の紋章の色彩に似せられていた。ディテールの特徴は真っ直ぐにならんだボタン、袖口の赤いカフス、ウェスト・コートの裏は赤、そしてレースや縁取りで装飾することなどが決められていたという。この1780-1800年イギリス製の Sarvant's Livery は見事にこの特徴をとらえている。袖口に赤いカフス、前打合いと袖口にリバティレースのトリミングがつけられている。黒人が着用したであろうこのコートを見て、当時の社会的背景はどのようであったかと思わずにはいられなかった(写真19)。

3. Museum of Fine Art in Boston

キュレーターよりアメリカの19世紀からのテキスタイルの動きについての説明があり、歴史の新しいアメリカでのテキスタイルの流れを、よく理解していただきたいと簡潔に話された。それは19世紀のアメリカでは機械で織られていたものが主流をなしていたが、1876年のアメリカ建国100年祭を祝うフェスティバルに出展のため、女性達は、テキスタイルやハンディ・クラフトに、つまり手工芸に再び目を向けた。忘れかけていた手工芸を復興させようという動きが高まり、1893年の展示会においてそれは確固たるものとなった。展示されている19世紀後半の作品の説明をうけながら、さて日本のハンディ・クラフトこれからはどうなるのだろうと思はず考えてしまった。

保存研究所にて、キュレーターよりテキスタイル・コスチューム補修、再生の過程の説明を受けた。それぞれの過程で専門の技術を修得した技術者が行うが、興味深かったのは、歴史衣装を洗濯する洗い場を見せていただいたことだった。ORVUS という専用洗剤を使うとの説

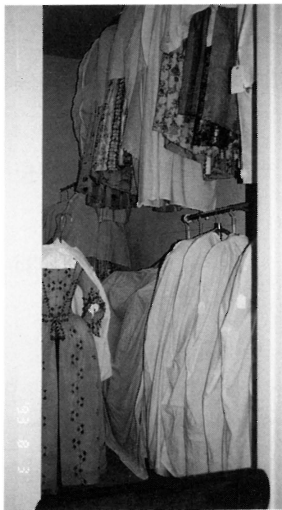


写真18 ウィリアムズバーグギャラリー収蔵庫



写真19 Servan's Livery



写真20 ポストンミュージアム保存研究所



写真21 ポストンミュージアム保存研究所

明があり、できれば洗濯方法も見学したいと思ったが時間がなく残念であった（写真20）。

部屋の一角では3人がかりで大きなタペストリーの修復をしている。15世紀の作品とか、細かい手仕事の作業である（写真21）。

Ⅳ お わ り に

以上が米国にて研修を行った概要の報告である。

ニューヨークは熱射を受けたような強烈な印象であり、また再び引き戻されそうな魅力をもっていると思った。それは東洋にも西欧にもない、いやアメリカにもない、ニューヨーク特有のパワーなのかもしれない。FIT はこれが時代の感性を先取りして、ファッションを創造する力なのだということを実感した。そして若い歴史の中でのアメリカ服飾の流れや、ハンディクラフトの動きを少なからず受けとめることができ、それらを今後の研究課題にしたいと考えている。また短期間の研修であったため、米国人の建国以来の心を大切にする開拓者精神には触れることができなかったが、常に新しいものへの探求心を垣間みて学ぶことが多かった。一度に多くのものを見たが、帰国してまだわずかの期間であり、未消化の状態だが、今回紹介できなかった収蔵品については次の機会に違った角度から捉えてみたい。

報告を終えるにあたり、このたびの研修に御理解、御援助下さいました本学関係の皆様へ深謝申し上げます。

そして米国研修旅行において、多くの御指導をいただきました国際服飾学会会長丹野郁博士をはじめ、学会員の皆様へ厚く御礼申し上げます。

(1993. 9. 10)

参 考 文 献

- 1) 世界の博物館3 メトロポリタン美術館 講談社, 1979
- 2) DRESSTUDY 14 京都服飾文化研究財団, 1992
- 3) Eighteenth-Century Clothing at Williamsburg, Linda Baumgarten, 1993